

ASSB

オルタナティブ
システムズ
スタディ・プレティン

準備号
1993年1月11日

編集人 安藤一夫

発行所 ASSB編集委員会

京都市中京区新樫木町通り
竹屋町上る西革堂町178
京都ガイア研究所内
tel. 075-212-2430
fax. 075-212-2655

会費振込先 (郵便振替)

(口座番号) 京都9-67283

(口座名) 資本論研究会

目次

1. 時代を先取りする知的創造集団をめざして
2. 21世紀デザインのための5つの仮説 安藤一夫
3. 情報コーナー
植田敦VS森住明弘シンポジウムを考える 安藤一夫
4. コラム
精神医学の現場より 平野 啓

時代を先取りする知的創造集団をめざして

ソ連の崩壊と資本主義世界の大不況という状況に直面して、オルタナティブな社会、経済、その他のシステムの具体的解明とその実現の途をさぐる必要にせまられています。

しかし、現在のところ、この課題を引き受ける知的創造集団は登場してはいません。

私たちはいま、「21世紀デザインのための5つの仮説」を提案し、現在の思想状況に挑戦します。この「仮説」以外にも様々な提案がゆきかう場としてのネットワークを形成するための広場づくりにとりかかります。

知的創造集団形成のために、下記の事業計画をたてました。皆さんの参画を期待しております。

(I) 1993年度事業計画 ネットワーク形成のための準備期間

(1) 会員制研究誌「ASSB」(オルタナティブ・システムズ・スタディ・プレティン)の発刊(1年間に限定)

月刊、B5版30頁以上(第1号1月末刊)

内容 ①「仮説」を実証するための研究論文
②ネットワーク会員によるコラム
③情報コーナー
④会員のページ

会費 正会員 : 年間1口 10万円
賛助会員 : 年間1口 3万円
購読会員 : 年間1口 1万5千円

会員の特典

- ①正会員には誌面を解放します。
- ②正会員、賛助会員には研究会などの催しを案内します。
- ③購読会員は会員のページに投稿できます。

(2)研究会、討論会の開催
随時行う

(3)次年度事業計画のための世話人の選出

(II)1994年度事業計画 ネットワーク活動の開始

世話人会による事業計画を研究誌で公表、討論のうえ決定する。

(III)ASSB計画詳細

(1)基本研究報告

準備号 11/29シンポジウム報告、コメント

関連文献案内、資料

1月号 生協運動はどこへ行くか

ICA世界大会への取り組みを中心に動向分析を行う。

2月号 エントロピーとエコロジー

マルクスにはアレがなかった、コレがなかった、という批判的批判に終ることなく、価値形態論からエントロピーを読む。

3月号 環境教育原論

加藤尚武『環境倫理学のすすめ』を手がかりに、「文化としての知」を根づかせるための原論を提起

4月号 図解 価値形態論

研究者について理解されなかったマルクスの価値形態論を図解し、マンガ世代の共感を誘うところみ。

5月号 協同組合資本論

資本が労働を使いこなす、というモンドラゴンの提起を資本の歴史的規定によって再提起し、実践上の諸難問にこたえる。

6月号 社会・文化・経済・国家

価値形態論とエントロピー論を武器に人類学、宗教社会学が発見した豊かなものを取り出す。

7月号 ネットワーク実践論

何でもかんでも「ネットワーク」の時代。意外にコレを使いこなす方法は知られていない。生協の産直運動を手がかりに問題に接近する。

8月号 文化圏の理論

「文化」というとらえどころのないものこそが、現代の社会変動の動向を正確にはかるモノサシである。

9月号 人口、資源、エネルギーと社会システム

使用価値視点からながめた「危機」を社会システムはどのように消化していくか。そのからみから、問題を把えなおす。

10月号 廃棄物と社会システム

廃棄物を価値・エントロピー視点から把えて、オルタナティブを設計する。

11月号 現代の多国籍企業

多国籍企業の経済圏の実態分析。

12月号 現代の世界信用経済圏

今日の二重化しつつある経済圏を、その中枢の動向を明らかにすることによって実証する。

(2)情報のページ

- 1月号 生協運動の現状
- 2月号 エントロピー論争サーベイ
- 3月号 環境教育文献解題
- 4月号 共同体論文献解題
- 5月号 モンドラゴン (スペイン・バスク地方の協同組合地域社会) 紹介
- 6月号 人類学文献解題
- 7月号 ネットワーク論文献解題
- 8月号 文化論文献解題
- 9月号 人口、資源、エネルギー文献解題
- 10月号 廃棄物問題文献解題
- 11月号 多国籍企業の理論
- 12月号 信用論文献解題

(3)コラム担当者 (予定)

- ①経済論評 (千田)
- ②精神医学の現場より (平野)
- ③教育の現場より (並木)
- ④シンクタンク便り (交渉中)

(4)会員のページ

- ①アンケート用紙を同封し、コメントを求める。
- ②投稿規定の作成。

21Cデザインのための5つの仮説
-ASSBへの私のかかわり-

安藤一夫

今日の社会システムは必ず変革される、という見地から、あらゆる問題を切断して見たい。この見地を以下の仮説として提示する。

1) 世界はどうか。

多国籍企業、多国籍銀行とオフショア金融市場とから成る巨大な経済圏が実体となって世界経済を形成し、国民経済は先進国も含めこの世界経済の圏とそれ以外の領域へと二重化する。

新たに成立した世界経済圏は、他の領域を喰いつくし、疲弊させ、あるいはヒジ鉄をくらわされて、立往生する。この経済圏を継承する次の主体は形成されない。人々はソ連の崩壊が、資本主義の崩壊の予告編であったことに気づく。

a) クリントンはアメリカを救えるか?

アメリカ政府といえども、多国籍企業の規制はできない。国内問題重視の姿勢は根本解決ぬきのものとなり、その結果、次の時代の社会システムの萌芽の形成を促進するものとなる。(大都市の解体、都市におけるコミュニティの復活、小農経営の復活、地方都市と農村との結合の基準にエコシステムをおく、etc.)

b) ロシアの市場経済化はどうか?

ロシアの市場経済化は、国家資本主義を成立させ、それは協同組合的社会への過渡期となろう。ロシアや中国が、アメリカやECの後を追いつくことは不可能である。国家資本主義から協同組合的社会への移行こそが最も現実的な方策である。この道を進めば、ロシアと中国は再び世界史の最前線に登場しうるであろう。

c) 第三世界はどうか?

第三世界は、30年間にわたって、多国籍企業によって、しゃぶりつくされた。今後多大な犠牲を払われようが、資本を労働が使いこなすシステムの形成という見地からは、最先端に位置している。先進国の経済が二重化する時、多国籍企業の世界経済圏とは別の国際経済圏を形成していくリーダーとして、登場することが期待される。

2) 革命とはどういうものか

世界経済が二重化し、支配経済が従属経済を喰いつくし、あるいはそれに拒否されて崩壊する、という第1の仮説からは、社会変革とは何か、ということについての第2の仮説が導かれてくる。

フランスブルジョア革命に典型的な、支配階級と被支配階級の政治的交代劇は、ブルジョア革命にのみ発現する、特殊な事態であった。ロシア革命は、このフランス革命

の事例を下敷にして、それを芸術にまで高めた。だが、その後の事態は、この革命のモデルが、プロレタリア革命のモデルとしては通用しないことを示している。

a) プルジョア革命の特殊性

革命の主体を形成したものは、商品・貨幣・資本であった。これに意志を支配された人々が都市を中心に多数を占め、人格的依存関係を統括していた古い国家権力を打倒したのであった。

プロレタリア革命にあつては、諸物象による意志支配を廃絶することが目的になるとすれば、物象的依存関係に支えられた人格的自由を実現している民主主義国家を継承することにはなりえない。

例えば、ポーランドの権力はプロレタリアートの独裁と見る他はないシステム（官僚の権力を連帯＝プロレタリアートが打倒したのである）なのだが、政治権力を握ったところで、何をしようのか分かっていない。

b) プロレタリア革命の概念

多国籍企業の世界経済圏や、先進国の国家制度と関係しながらも、それらとは独自の地域自治システムを形成し、生命の再生産の圏を掌握することによって、世界経済圏や国家を干しあげる。これが労働の社会化の実現である。

3) 物質、価値、エントロピー

プルジョア社会をつき動かしてきたのは、価値増殖の衝動であった。価値とは物質にとりついた、人間の社会関係であり、人の意志を支配するシステムであった。

人間の社会を物質代謝として見、これをエネルギーに換算して、エネルギー効率を計算することができる。資本のシステムは、過去労働を支配する量が大きいほど、それだけ急増に増殖できるシステムであるから、諸資本の競争に勝ち抜こうとすればエネルギー効率を悪化させるしかなかった。

従って、エネルギー効率と資本の増殖とは反比例の関係にある。

ところで、エネルギーがある物の自己自身との関係であるのに対して、エントロピーとは、ある物の他の物とのエネルギーを媒介とした関係である。この関係は価値が、人の意志を支配する概念的存在であったことに照応する。それは自然のシステムをつき動かす衝動である。

そこで出てくる問題は、エネルギー効率の計算は、価値実体論レベルの議論に相当し、一つの機械的抽象となることである。これに反し、エントロピーは、現実が行う、総合的抽象の場で成立している。

価値のシステムに対抗するシステムを形成しようとするときの基準が、エネルギー効率では不十分で、エントロピーから基準を導かなければならない根拠がここにある。

4) エコロジーとエコノミー

資本制的経済のエコノミーの原理が価値であるのに相応して、生態系のエコロジーの原理はエントロピーにある。価値の実体が社会的労働（物にとりついた）であったのに相応して、エントロピーの実体は熱にある。

エントロピーの法則は価値法則よりも本源的である。 価値増殖を目的に使用価値を生産する今日の経済システムがそれ自体の発展の究極の段階でエントロピーの法則につき当たったとすれば、生命の再生産の圏からエントロピーの法則の浸透がはじまるであろう。

5) 科学的知から文化的知へ

科学は、対象と思考との同一性という仮説に基礎をおいている。価値やエントロピーが総合による抽象を行っており、思考とは別の様式で概念的に存在しているとすれば、科学的知はその前提を失い、妥当性を欠く。価値批判とエントロピーの法則への順応は文化の問題であり、文化としての知が問われる。

思考が自己とは根源的に他者である概念的存在を承認するとき、文化としての知への歩みが始まる。（以上）

榎田敦VS森住明弘シンポジウムを考える

安藤 一夫

榎田VS森住シンポに参加した。榎田氏があげている事実問題とそれへの森住氏の反論についてはコメントする材料をもっていない。榎田氏が一番主張したかったことは、市民運動によるリサイクルという個人の努力で環境問題が解決されるというのは幻想であり、「個人の努力ではなく、社会のシステムの中で解決していく具体的なプログラムを作る運動を形成して欲しい」ということだったろう。

他方、森住氏にあつても、従来、理系の間が、キケンだキケンだということを主張して、住民運動の音頭をとってきたが、それでは限界があるということを認めている。森住氏の場合、住民運動に密着しているのだから、榎田氏の論点とは全然異なった観点からではあるが、リサイクル運動の限界を指摘し、そのうえで、社会系の人間の関与を得て、汚れとつきあえる社会システムについて構想しようとしている。

社会システムの問題を究極の問題と捉えている点では両氏とも一致しているが、しかし、その内容は全く違っている。榎田氏は、自然の循環にのせられるもの以外は製造しない、という原則をたて、土にかえる、捨てられる物と無害で燃やせる物以外のものについては、高額な税金をかけ、経済的な誘導をもって、この原則を実現しようとしている。これが榎田氏の求める社会システムである。他方、森住氏は、「分別収集システム」や「素人と共に仕事ができる社会システム」（『汚れとつきあう』森住明弘、北斗出版）という主張から知れるように、今日のリサイクル運動と連続し、その限界を克服できる社会システムを追求しようとしている。

双方の社会システム論は水と油のように分離したままである。このようになるのも、それぞれが社会システム論を構想する際に、リサイクル運動に対する自然科学的立場からする相反する見解の直接的な延長線上に社会システムを想定しようとしているからではないだろうか。

自然科学的な真理を発見し、それを社会システムにおいて実現しようとするとき、人々は社会システムを自由な人間の契約関係として想定しがちである。社会システムが、そのようなものであれば、発見された真理の教育と普及、つまり、啓蒙によってその真理にさからわない社会システムを形成しえよう。

しかし、現実の社会システムは、そのようにはなっていない。はたして、人間は、そこで自由な意志をもった主体として存在しているだろうか。“わかっちゃいるけどやめられない”という世界、社会関係に意志を支配された主体が、そこにあるのではないだろうか。

もし、そうだとすれば、新たな社会システムを構想しようとするとき、それを望ましいものとして描くことよりも、現存する社会システムの運動のなかから、それがいかんにして形成されるか、という問題を解明することが重要となろう。

そのためには、今日の社会システムの運動の法則性を知らなければならぬだろう。ところがそこで出てくる問題は、従来社会システムの運動の法則性を捉えようとしたマルクス、レーニン主義の諸説が生命力を失っているという事態をどう見るかということであろう。しかし、よく考えてみれば、伝統的なマルクス、レーニン主義の立場とされている「社会の合法的な発展」論もまた、今日の社会システムが人間の意志を支配している、という現実をふまえずに構想されたものだったのではなからうか。

人の意志を支配するシステムが、自立的に運動していく過程で、どのようにすれば人がこれを制御できるのか、このことが明らかにされなければならないだろう。

- 資料
1. 『朝日新聞』1992年12月3日記事
 2. 「エントロピー論と廃棄物」槌田敦
 3. 「住民運動の現場から」森住明弘
 4. 「エントロピー文献集」河宮信郎

資料について

槌田氏と森住氏の論争の内容は、1. で整理されている。より詳しく知りたい方は、この記事で紹介されている文献を求められたい。

ここであげたその他の2文献は、いずれも、論争点の底にある問題をさぐるためのもので、エントロピー学会発行の『エントロピー読本Ⅳ』より引用した。

なお、森住明弘氏の著作には、『汚れとつきあう』『ゴミと下水と住民と』（北斗出版）の2冊がある。

1 彼は、一人で暮らしている。発病は、数年前だった。退院してから、母親への暴力がつづいた。彼女が、おれをこんなめに、というのだった。そこで母は、長男と同居することに決めた。自分がいなければ、彼は生活できないだろう、という思いで我慢してきたのだったが、限界だった。彼は、あいかかわらず、通院を続けていた。死ぬ、入院しろ、お前は、まだそんなことをやっているのか、分裂症め、と隣の人が夜となく昼となく脅かしてくる。心配しないで、直るわ、と女性の声が聞こえることもある。

声のために眠れない、といい、精神安定剤をのんでいる。彼は焦っている。仕事を見つけなければならない。友人もいない。食事は外食か、母が時々届けてくれる食事を食べている。

職についても、幻聴や人間関係に負けてすぐだめになってしまう。彼はいいかえすことができないのだ。趣味は音楽を聴くことくらい。寂しい、友人がほしいという。デイケア（昼間、病院の一部屋で、料理を作ったり、草細工をしたり、ゲームをしたりして集団関係を作るために設けられた援助方法）にさそっても、自分勝手にギターをひいたり、その場にそぐわない行動がつづくので、他のメンバーから疎まれてしまう。

沖縄で仕事をしていたとき、長年精神病院に入院していた女性が、病院側から退院を要求されたことがある。彼女は、戦後、占領米軍のために働き、失業して、コザで売春をしていたころ言動がおかしいというので、強制入院させられていた。退院後、めんどろをみようという家族はおらず、しかたなく、沖縄北部の、海岸に、掘っ建て小屋を建てて、そこに彼女をひとりで住ませた。ある日、彼女は親戚や福祉事務所の役人、町役場の人につれられて、病院を受診した。親戚は、彼女を旅行に誘おうと言って病院につれてきたのだった。関係者の言うところでは、夜中に大声を出す、裸で道に出る、たばこの不始末がこわい、子どもに石を投げる、ので入院させたいということだった。

入院は断り、定期的な往診を約束した。南支那海の海岸は金や、エメラルド、深いブルーに無限に変化した。彼女の家は、道沿いにあり、入り口がなく、ゴザの重なりをジャングルのようにかきわけて中にはいる。壁と床は板張りで、衣装や、家具類は整理されており、炊事も“一応”できるようになっていたが、水道とトイレがなかった。煙草は、大きな缶の中に捨てられており、散らかってはいなかった。要するに、大声を出すのは、幻聴とそれに伴う頭痛のためであること、裸で道に出るのは、水道がないので、道沿いにある水道口を利用して水浴びをすること、子どもに石をなげるのは、かれらに石を投げられるからだということがわかった。入院を要する状態ではなく、それ以前にやるべきことがあった。水道をひくこと、トイレをつくること、福祉事務所の仕事は、

人に生活の最低条件を保証することではなかったのか？

彼女は毎朝、コザからくるはずのバスを、永久に来ないバスを待つのがだった。そうしてコザで商売をするのである。さいわい、頭痛の軽減のための精神安定剤をのんでくれた。それから幻覚も薄れ、住民の不安も薄れた。

冬になり、しだいに壁や床の板が剥がされていった。夏には、海辺に打ち寄せる板を、炊事用に使っていたが、それがなくなったから。往診に行くごとに、家は透き間風が吹くことが多くなった。ついに床は、砂だけとなり、彼女は砂の上に布団を敷き寝るようになった。

家を改造する間、入院をさせることにした。強制的にでも。人の善意だけでは、どうにもならないこともある。彼女はしぶしぶ入院に納得してくれたが、入院中、あれほど苛酷な条件でも損なうことのなかった健康が、失調し、肺炎となった。二週間ほどの入院で、家に戻ったが、まずいことに、板張りの家が提供されていた。

以上の二例では、異常な社会排除、したがって自己排除の状態が（社会によって媒介されなければ、自己は自己と媒介することができない）あきらかである。一人で生きる、と言う命題は、形容矛盾である。そのような状態での自己実証は、自己吟味的性格をもつ関係としての意識をして、ある社会的形態をとらせることで、迂回的に実現するほかはない。ところが、現実はのりこえようとして、のりこえられるものではない。彼らに告知されるのは、結局、社会的死、脅迫、あるいはさきおくりの希望なのである。

2 六一七年前から、陰部から異臭が取れないという男性がいる。彼は、大工だったが、経済的安全のために素性の異なる人々ばかりのインテリ会社に就職してから、その臭いに悩まされることになった。もう一人は、東北地方の農民出身の自衛官で、陰部に手をやったその手で、左肩に触った所、常にその肩から異臭がきえない、という。

「乞食の忌まわしい犯罪は、嫌悪に満ちた口調のせいで、胸がむかつくような不潔さと結びつけられた。それはまさに、当時の道徳秩序が最も激越でもっとも陰険な形で現れた一つの例にほかならなかった。『悲惨、悪徳、怠惰、精神の退化、魂と肉体の腐敗、これらすべてのものが赤貧と不潔という潰瘍と傷口のもとに分解され臭いを放つのである』——オゼールの導き出した結論は当然ながらいささかのあいまいさも含まないものである。『物質的純粋さは精神的純粋さを用意する。そして善の伝染力は悪の伝染力に劣らぬたしかな法則性をもっている』——清潔さは意識の秩序の指標であり、清潔さを心がけることによって、人から尊敬されると同時に、人を尊敬するようになる。——九世紀以後、清潔さは人と人を区別する特徴となる。したがって清潔であれば第一印象はしばしば好ましいものとなる。人間は表象世界と記号言語の世界で外観が示すとおりのものである。衛生学者は倦むことなく、ある一つのコードの鍵、さらには外観を読みとくための鍵をわれわれに委ねようとする。——強烈な腐食力をもつ不潔さとそれに伴う悪の軍団、こうしたものに対する奇跡的な治療方法とは、

どんなに貧しい部屋でもまたどれほどむさ苦しい屋根裏部屋でも健康的で美しいものに変えてしまう清潔さである。——こうして、一九世紀に、清潔さへの気遣いが、強靱な人間の肉体という富の生産機械に健康を付与するという理由でようやく正当化され、世俗的かつブルジョワ的な新しい職業倫理という接点で肉体と精神を結びつけるようになったとき、ブルジョワ的偽善はその頂点に達することになる。」（ジュリア・クセルゴン 『自由・平等・清潔』 河出書房新社 1992 34-43P）

彼女は、一九世紀における清潔さへの異常な関心を、当時の、細菌学・衛生学と、キリスト教的道徳及び労働秩序の複雑な諸関連の中から、解読しようとしているが、このことは、マルクスが、商品形態に関連して、シェークスピアを引用し、「男ぶりがよいということは境遇のたまものだが、読み書きができるということは生れつきだ」（資本論 1 75P 河出書房新社）といった主客転倒と同じ事態であり、その根もおなじであろう。例として挙げた二人の男性の幻臭も、彼らのおかれた社会的・文化的状況の変化と無関係とは思われない。

「一九世紀において、だれもが体を清潔に保ちたいと思うようになり、その言説が脅迫観念的なものになると、新たな不安が姿を現してくる。すなわち、うわべだけで人の目を欺こうとする偽の清潔さが病的な誘惑を張り巡らしているとき、もしその下に本当の不潔さが隠れているとしたら？ いいかえれば、下層民から成り上がった素性のいかがわしい者のあの不潔さがひそんでいるのではないか？ 何しろこうした人間たちの根元にあるのは、例の行商人の背徳と汚れなのだから。」（同書 49p）

DSM-III R（精神障害の診断統計マニュアル—三版改定版）において、妄想性障害の、身体妄想の項には、下層階級の人に多いとコメントされている。

3 体がおかしい、耳の血管が下がって腸まで達している、臓器全体が左による、あるいは下に下がってしまうので、バンドで止めておかなければならない、耳の血管も下がるのでこよりで止めてある、あるときは、足の先まで腸が下がるから、寝転んでいないといけない、と訴える夫人がいる。

あるいは、創価学会から勧誘を受けた後、その家庭から体が引っ張られる感じがする、朝、起きたときに体から何か抜けて行くような感じがして苦しい、体が空っぽになったようだ、あるいは変形していく、特に胸部が変形していき、引っ張られもする、という婦人もいる。診断的な差異はさておき、この現象の水面下で起こっている事態はなんだろうか？

現在の身体医学は、死体の観察から出発した。身体医学の権力は、人間関係の解体と歴史的に照応していた。人間の身体は、その生態学的・社会的・文化的・経済的文脈から切断されて医師の視線に映る。その視線は患者に投影されて、患者もまた自己の身体を、いわば、一種の機械としてみるようになる。この機械は、労働し、家事をし、育児をし、他者と関係し、やがて使い捨てられる機械である。しかし身体は社会的身体である。政治的身体である。それだけではない。身体は、感情と、感覚をもって状況に向かい、状況を評価する。この評価が、知的認知の源泉となる。集団的身体は、時には孤

立して状況との社会闘争を戦っているのだが、自己の身体医学的視線と、ブルジョワ的主知主義、認知主義、精神／肉体の二元論に妨げられて、意識に上らず評価されない。それゆえ、身体が、社会闘争に負けた場合には、身体と感情の全体的な歪曲と否定として意識にのぼるしかない。身体と、精神は分離して意識されているので、彼／彼女は、ある根源的次元で自分が戦っていることを知らない。ブルデューが、「実践的信念は、『魂の状態』ではないし、ましてや制度化された教義体や学説への一種の決断的同意（「信念」）でもなくて、こう言ってよければ身体の状態である。」（ピエール・ブルデュー『実践感覚』1 みすず書房 1988 109P）

と言ったのは、貴重だろう。心気症・身体変形妄想・等が増えているように思う。これは何を示唆しているのだろうか？

92/12/31

100

100